



新春特別
思いつき企画 スクリーンのない映画館 「故郷」

写真は山田洋次監督の古い映画「故郷」のスクリーンからのコピー。このお正月、衛星テレビのスカパーでも放映されたようです。

瀬戸内海の小島で暮らしてきた一家が、近代化の波に追われ、家業を断念せざるをえなくなるまでを描いた映画でした。劇中、古くて修理もきかないオンボロ船は、うちのコンバインの姿とそっくりでした。そ

して、「船長」を「百姓」と聞き替えているながら、井川比佐志と渥美清が演じる次の場面をかみしめました。

ただし、映画との大ちがいもあって、百姓は食べ物をつくる仕事だということ。たしかに「ずっと安い」し、「ずっとつらい」かもしれないけど、「ずっと楽しい」と、あいかわらず粋がりたいと思います。今年もよろしくお願いたします。

「どう、その後、石船のほうはやつていけそうかね」

「それがのう、まあ、いろいろ考えたんじゃが、もうやめよう思うとるんじゃ」

「そうかあ。それじゃ、あんた船長さんじゃなくなるんだ。船長さんじゃなくなって、労働者になっちゃうんだ」

「船長も労働者も、たいして変わりやせんわいのう」

「いやちがう。そりや大ちがいだ」

「どこが？」

「第一、給料がちがう。船長のほうが、ずっと安い」

「・・・」

「それと労働がちがう。船長のほうがずっとつらい」

「はっははは、は、は・・・」

「でも、ま、船長さんはやっぱり船長さんだよ」

「うん」

「朝から晩まで一生懸命働いて、何一つ悪いこともしないのに。どうしてかねえ。どうして先祖

「故郷」 1972年 松竹
監督・原作:山田洋次
出演:井川比佐志 倍賞千恵子

代々住み着いたあんなきれいな村を出ていかないけんかねえ。ええ？」

「食うちやいけんけえ、しょうがなあのう」

「そうかなあ。すると、この島も工場の敷地みたいになっちゃうのかなあ。やだねえ」

「・・・」

感謝しながら・・・初日の出

23年前、長女が産まれたときに、土の上で子育てをしたいと思ってUターンしました。平飼養鶏に取り組んで、最初は、できた玉子を見本として配ってまわったのでした。以来、ずっと購入いただいているお客様もいらっやあって、ありがたいことと感謝しています。当時、背中におんぶしていた赤ん坊も学業を終えて・・・、今年のお正月には初日の出と一緒に拝みました。

